

C-6

パイワン語における *i-* の特徴—「*i-* + 名詞」と「*i-* + 斜格 + 名詞」の比較より—

大谷青渚

(京都大学大学院/日本学術振興会特別研究員 DC2)

【要旨】

台湾南部で話されているオーストロネシア諸語のひとつであるパイワン語では、場所を表すために用いる表現が「*i-* + 名詞」と「*i-* + 斜格 + 名詞」の二通り存在する。この二つの表現間の違いを詳細に分析すると、1) 名詞の [±場所性] により斜格の出現は予測可能ということが言え、2) 「*i-* + 名詞」は動詞的な特徴、「*i-* + 斜格 + 名詞」は前置詞的な特徴をもち、3) *i-* は移動動詞派生接辞に属する接頭辞であるということが分かった。

1. パイワン語（北部方言）の概略

- ・台湾南部、オーストロネシア語族
- ・音素：p, b, v, m, t, d, s, z, n, c [ts], r, tj [tʃ], dj [dʒ], l [l~lj], ɖ, k, g, ng [ŋ], ʔ, j, w, a, i, u, ə
- ・基本語順は VSO、フィリピン型のヴォイス体系を持ち、膠着語的な性質を持つ
- ・格標識：主格・属格・斜格、単数/複数（人のみ）、人/普通名詞の区別を持つ
→表 1 と例文 (1)(2) 参照
- ・*i-* の特徴：一般的に (3)名詞にしか付かず、(4)空間名詞との共起がよくみられる

| | 主格 NOM | 属格 GEN | 斜格 OBL |
|---------|--------|---------|------------|
| 人 SG/PL | ti/tia | ni/nia | tjai/tjaia |
| 普通名詞 | a | na, nua | ta, tua |

表 1 : パイワン語の格標識

以下の例は斜格標識の通常の使用例である。

- (1) na-t<əm>arar ti vuvu tua ʔ<in>ata-ʔata
 PRF-wear.crown PS.SG.NOM grandmother OBL RED<PRF>-beads
 「祖母はトンボ玉の飾りを頭に飾っている」

- (2) pa-dijwa=akən tjai Sawnijaw
 CAUS-telephone=1SG.NOM PS.SG.OBL NAME
 「私はサウニヤウに電話をかける」

- (3) *i-gadu* 「山で/に」、*i-umaʔ* 「家で/に」、*i-djalan* 「道で/に」、*i-kuin* 「公園で/に」、
i-gaku 「学校で/に」、*i-siubai* 「店で/に」、*i-tjatjan* 「泉で/に」、など

- (4) *i-taladj* 「中で/に」、*i-vavaw* 「上で/に」、*i-tsasaw* 「外で/に」、*i-vililj* 「後ろで/に」、
i-maza 「ここで/に」、*i-ʔajaw* 「前で/に」、*i-likuz* 「下で/に」、など

2. 先行研究の概観

tua, ta に関しては 1 節で述べたように、先行研究でも斜格という解釈で一致している。

次に i に関して、表 2 に見るように先行研究において品詞は前置詞ということでおおむね共通しているが、語か接語かあるいは接辞であるかという点においては統一見解はいまだないように思われる。またどのような判断基準から語・接語・接辞であるという分析がなされているのかも十分な記述がない。

| | 小川・浅井 | Zeitoun et al. | Chang | Huang ¹ | 張 |
|---|-------------------|----------------|--------|--------------------|----|
| i | (元は) 位置を示す 独立語 | 語・前置詞 | 接語・前置詞 | 接語的かつ接辞的・ 前置詞 | 接辞 |

表 2：先行研究における i の特徴

表 3 は先行研究で i+ 名詞、i+ 斜格 + 名詞という形式の記述があるか否かを示している。○はその形式の記述があることを指し、×はその形式の記述がないことを意味している。小川・浅井 (1935: 133) や Chang (2006: 183-184)、Huang (2012: 143) のように二つの形式が存在することを明示している先行研究と、どちらかの形式しか明示していない先行研究が存在する。ただし、土田 (1992: 79) や張 (2016: 77-79) においても、例文を確認するとどちらの形式もそれぞれ存在することがわかる。

| | 小川・浅井 | 土田 | Chang | Huang | 張 |
|------------|-------|----|-------|-------|---|
| i+ 名詞 | ○ | × | ○ | ○ | ○ |
| i+ 斜格 + 名詞 | ○ | ○ | ○ | ○ | × |

表 3：先行研究の記述における二つの形式の有無について

3. 分析

本節ではまず、i+N と i+ 斜格 + N の間にどのような使い分けがあるのかを見た後で、それぞれの特徴を個別に見ていく。

まず i+N と i+ 斜格 + N のそれぞれの実際の用例を以下に挙げる。引用の場合は出典を記してある。出典の記載のないものに関しては発表者のデータからの例である。

(5) i+ 名詞 の使用例

| | | | | |
|-----------------|---------|--------|------|----------|
| v<ən>əli | ta | ita | hon | i-siubai |
| buy<AV> | OBL | one | book | i-shop |
| 「店で本を一冊買う」 | | | | |
| d<əm>ava-davats | timadju | i-kuin | | |
| RED<AV>-walk | 3SG.NOM | i-park | | |
| 「彼は公園で散歩をしている」 | | | | |

¹ Huang (2012: 143) で「i は基本的には接語だが、特にヴォイスが付いたときには接辞らしく振舞う場合がある」と述べ、2012 年の論文では接辞の i- のみを分析対象としている。

| | | | | | | |
|-------------|---------|-----|-------|-----------------|-----|-------|
| ʔəvut-in | niamdu | a | dinki | <i>i-taladj</i> | a | umaʔ |
| turn.off-GV | 3SG.GEN | NOM | light | i-inside | LIN | house |

「彼は家の中の電気を消した」

(6) i+ 斜格 + 名詞 の使用例

| | | |
|--------|------------|--------------------------|
| nakuya | d<əm>avats | <i>i-tua-tsəmətsəməl</i> |
| don't | walk<AV> | i-OBL-grass |

「芝生を歩いてはいけない」

| | | | |
|----------|------------|------------------|---------------|
| ʔau | a-zua | mare-ʔali | ʔ<əm>iladj |
| so | NOM-that | pair-male.friend | sit.down<AV> |
| <i>i</i> | <i>tua</i> | <i>ʔapaz</i> | nua kavuavuan |
| i | OBL | fence | GEN field |

「男友達は畠の縁に座っている」(小川・浅井 1935: 183)

| | | | | |
|------------------|----------|------------------|------|------------------|
| paŋtjəz-u=anga | <i>i</i> | <i>tjanuaken</i> | nu | tsua-tsuj=anga |
| come-IMP=EMPH(?) | i | 1SG.OBL | when | RED-long=EMPH(?) |

「今度は私のところに来い」(小川・浅井 1935: 205)

上記の (5)(6) 以外にも、(7)名詞部分は同じでも i+ 名詞 と i+ 斜格 + 名詞のどちらを使っても問題がないように見える例もいくつか確認できた。

(7)

[djəlap 「壁」に関して]

| | | | |
|----------|-------|-------------------|---------------------|
| a-zua | tuki | s<in>i-pa-kələj | <i>i-tua-djəlap</i> |
| NOM-that | clock | IV<PRF>-CAUS-hung | i-OBL-wall |

「あの時計は壁にかかっている」

| | | | | |
|-------------------------|----------|-----|---------|-----------------|
| p<in>a-kələj-an=anan | a-itsu | a | sjasin | <i>i-djəlap</i> |
| CAUS<PRF>-hung-LV=still | NOM-this | LIN | picture | i-wall |

「この写真はまだ壁にかかっている」

[tapau 「小屋」に関して]

| | | | | | | | | |
|-------------|----------|-----|----------|----------|------------|--------------|-----|---------|
| dj<əm>aljun | tiamadju | a | ma-drusa | <i>i</i> | <i>tua</i> | <i>tapau</i> | nua | ʔatjuvi |
| arrive<AV> | 3PL.NOM | LIN | NUM-two | i | OBL | hut | GEN | snake |

「彼ら二人はヘビの小屋に着いた」(小川・浅井 1935: 147)

| | | | |
|-----|-------------|----------|--------------|
| sa | dj<əm>aljun | <i>i</i> | <i>tapau</i> |
| and | arrive<AV> | i | hut |

「そして小屋に着いて、」(小川・浅井 1935: 191)

[kalevelevan 「空」に関して]

sa katsu-i=akən a s<əm>a-vavua i tua kalevelevan
 and take-GV-1SG.NOM LIN go.to<AV>-upper i OBL sky

「(すると神様が来て、)私を天の上へ連れて行ってくださった」(小川・浅井 1935: 188)

masanə-lusəʔ=anga a vitjuʔan a pənuljat i kalevelevan
 make.AV-tear=already NOM star LIN all i sky

「空にあるすべての星々が涙に変わった」(原住民族委員会ホームページ『小王子』より)

このような現象に関して、Chang (2006: 183-184) は i と名詞句の関係について以下のようにまとめている。

- (8) i=[locative N] (*i=tua [lovative N])
 i=[OBL common NP] (i=[common NP] も可能)
 i=[OBL personal NP] (*i=[personal NP])

しかしこのままでは斜格との関連がわかりにくく、なおかつ “locative N” とは具体的にどのようなものを指すのかが不明瞭である。

本発表では、名詞の素性に [±場所性] を認めることで、i+ 名詞と i+ 斜格 + 名詞の使い分けをより明瞭に提示し、なおかつそのことによって斜格の出現が予測可能であることを示す。

| | N= [+場所名詞] | N= [±場所名詞] | N= [-場所名詞] |
|------------|------------|------------|------------|
| i + N | ○ | ○ | × |
| i + 斜格 + N | × | ○ | ○ |

表 4: 名詞の場所性と斜格の使用の相関

(9)[±場所性] の定義

+場所名詞: 上下左右・前後・東西南北などの絶対的基準もしくはここ・あそこなど相対的基準を持つ名詞

-場所名詞: 人名や人、人の属性(父・母・兄弟姉妹など)を表す名詞

±場所名詞: その他の名詞

表 4 と (9) をもとに考えると、(5) の例の中で義務的に i+ 名詞形式が用いられているのは最後の例 (i-taladj) のみで、(6) の例の中で義務的に i+ 斜格 + 名詞形式が用いられているのも最後の例 (i-tua-tjanuakən) のみということになる。

±場所名詞においても、文脈やその他のなんらかの要因によって i+ 名詞を使うほうがより適切な場合もしくは i+ 斜格 + 名詞を使うほうがより適切な場合があると考えているが、詳しくは今後の課題とする。

続いてそれぞれの形式の形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴について述べる。

先に表にまとめるとそれぞれの形式は表 5 のような特徴を持つことがわかる。表中の「-」記号は文献資料や発表者のもつデータからはそのような例が確認されなかったことをあらわし、その表現が非文であるかを示すものではない。

| | 形態 (-u 'IMP' を付けられるか) | 統語 (文頭位置に来れるか) | 意味 (動詞的か前置詞的か) |
|------------|--------------------------|-------------------|-------------------|
| i+ 名詞 | 可能 | 可能 | 動詞的 |
| i+ 斜格 + 名詞 | - | - | 前置詞的 |

表 5：二つの形式の形態・統語・意味的特徴

個別の事例を i+ 名詞と i+ 斜格 + 名詞について簡潔に見ていくと、(10) と (11) のようになる。前者は形態的・統語的・意味的に動詞らしい特徴を持つと言え、後者は前置詞的特徴を持つといえる。

(10) i+ 名詞について

形態：ka-i-maza-u (ka-i-here-IMP) 「ここにいる」

語幹から動詞を派生させる接頭辞 ka- を伴って、命令形接尾辞 -u を付けることができる

統語：i=vavua ti zəpʉl (i=field PS.SG.NOM NAME) 「ゼブルは畑にいる」 (Chang 2006: 117)

VSO 型言語において、とても動詞らしい位置に置くことができる

意味：～にいる、～にある

(11) i+ 斜格 + 名詞について

形態・統語：ともに文献資料や発表者のデータからは該当する例が見つからなかった。

意味：～で、～に、～へ

最後に語彙的接頭辞 ((Nojima 1996; Lexical Prefix (LP)) と i の関係性について述べたうえで、パイワン語の i- は接頭辞であることを主張する。

パイワン語には主に名詞語幹について動詞を派生する語彙的接頭辞と呼ばれる動詞派生接辞がいくつか存在する。(12)(13) にいくつかの例を挙げる。

(12) 甲群

k<ə̃m>asi- 「～から来る」 k<ə̃m>asi-Timur 「三地門から来る」

s<ə̃m>a- 「～に行く」 s<ə̃m>a-gaku 「学校に行く」

pi- 「～に置く」 pi-zua 「そこに置く」

(13) 乙群

maka- 「～を終える」 maka-və̃tsik 「宿題を終える」

s<ə̃m>anə- 「～を作る」 s<ə̃m>anə-tjəkuza 「橋を作る」

pi- 「～を洗う」 pi-lima 「手を洗う」

語彙的接頭辞を甲群と乙群に分けたのには理由がある。まず、甲群に属する語彙的接頭辞は表 5 でみたような i+ 名詞、i+ 斜格 + 名詞とほぼ同じ振る舞いをする。つまり、LP-+ 名詞と LP-+ 斜格 + 名詞という使い分けが存在し、その特徴は表 6 のとおりである。

| | 形態 (-u 'IMP' を付けられるか) | 統語 (文頭位置に来れるか) | 意味 (動詞的なのか否か) |
|--------------|--------------------------|-------------------|------------------|
| LP-+ 名詞 | 可能 | 可能 | 動詞 |
| LP-+ 斜格 + 名詞 | — | — | 前置詞的 |

表 6：語彙的接頭辞 (LP)：甲群の形態・統語・意味的特徴

(14) LP-+ 名詞について

形態：pi-zua-u (put-that-IMP) 「ここに置け」

統語：以下の例に見るように manu を除外すれば文頭位置に LP+ 名詞が来ている

manu s<əm>a-pairang a tsautsau a ma-ɟusa mare-ʔali
then go.to<AV>-plains NOM people LIN NUM-two pair-male.friend

「二人の男友達は平野に行った」(Early & Whitehorn 2003: 168)

意味：動詞的

(15) LP- 斜格 + 名詞について

形態・統語：ともに文献資料や発表者のデータからは該当する例が見つからなかった。

意味：前置詞的

以下の例に見るように該当箇所である s<əm>a-tua-mamazajilan は、ʔ<əm>əpu の付加詞のように用いられる。

a uʔalaj vavajan kakedqian mapuljat ʔ<əm>əpu s<əm>a-tua-mamazajilan
NOM man woman child all gather<AV> go.to<AV>-OBL-chief

「男も女も子供もみんな頭目のところに集まった」(小川・浅井 1935: 249)

そのほかに注目しておくべき点は、甲群と乙群にそれぞれ意味の異なる pi- という形式が存在するという点だ。甲群の pi- 「～に置く」は pi-zua 「そこに置く」や pi-ta-tsukui 「机に置く」のようにどちらの形式も可能だが、乙群の pi- 「～を洗う」に関しては *pi-ta-lima 「手を洗う」は非文となることが確認できている。

このことから、パイワン語は語彙的接頭辞の中にも二種類あると考え、甲群と乙群に分類している。また本発表では甲群の語彙的接頭辞主に人や物の動作を表していることから特に「移動動詞派生接辞」と呼ぶ。また、多くの類似点からパイワン語の i もこの移動動詞派生接辞に含まれると考えることは妥当である。そのためパイワン語の i- は接辞であると主張する。

4. 結論

本発表では i+ 名詞と i+ 斜格 + 名詞の分析を通して以下の三つのことを明らかにした。

1. 名詞に [±場所性] を認めることで二つの形式の使い分けの条件がわかり、斜格の出現位置の予測も可能になった。
2. 先行研究で述べられているように i+ 斜格 + 名詞は確かに前置詞的な特徴をもつが、i+ 名詞の持つ特徴は動詞的といえる。
3. パイワン語の i- は移動動詞派生接辞の一種である。つまり接頭辞である。

【略号】

| | | |
|------------------------|-----------------|--------------------|
| AV: actor voice | CAUS: causative | EMPH: emphasis |
| GEN: genitive | GV: goal voice | IMP: imperative |
| IV: instrumental voice | LIN: linker | LV: locative voice |
| NOM: nominative | NUM: numeral | OBL: oblique |
| PL: plural | PRF: perfect | PS: person |
| RED: reduplication | SG: singular | |

【参考文献】

- Chang, A. (2006). A reference grammar of Paiwan [Ph.D thesis]. Australian National University.
- Early, R., & Whitehorn, J. (2003). *One Hundred Paiwan Texts*. Australian National University.
- Huang, W. (2012). A study of verbal morphology in Puljetji Paiwan [Master thesis]. National Tsing Hua University.
- Nojima, M. (1996). Lexical prefixes of Bunun verbs. *Journal of the Linguistic Society of Japan*, 110, 1–27.
- Zeitoun, E., Huang, L. M., Yeh, M. M., & Chang, A. H. (1999). Existential, Possessive, and Locative Constructions in Formosan Languages. *Oceanic Linguistics*, 38(1), 1–42.
- 小川尚義・浅井恵倫 (1935). 『原語による臺灣高砂族傳説集』台北：刀江書院.
- 土田滋 (1992) 「パイワン語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一（編）『言語学大辞典 第3巻 世界言語篇（下-1）』東京：三省堂.
- 原住民族委員会 (2021) 「族語 E 樂園」 <http://web.klokah.tw/>（最終閲覧日 2021 年 5 月 14 日）
- 張秀絹 (2016) 『排灣語語法概論』新北：原住民族委員会.